

**編集部** 福嶋さんは、事前に新しいアイリッシュセッター（ゴールドラセット）をご覧になっていたことですが、率直な印象はいかがでした？

**福嶋** 僕が初めて触って見た印象は、単純に「あれ、いいな」というものでした。とにかく革のよさが第一印象でした。履き込んでいって、すこしい味が出るんじゃないか。さらに、この革の登場によって、あれもできるだろうし、これもできるのではないだろうか。黒革もいけるだろうし、いろいろな色の革にも反映できるだろうし、そういう意味では、これからの

## 「ハリのある革で、透明感のある艶を出したかったのです」

レッド・ウィングに新たな期待を抱きました。

**編集部** ヴィンテージから現行モデルまで、数えきれないアイリッシュセッターを見てきた福嶋さんがうなずく革。一体この革の何が違うのですか？

**鈴木** 今の875のオロイジナルという革は、オイルがたくさん入っているのですが、オイルが入ると撥水性がよくなる、加えて革が柔らかくもなる。だから比較的足に馴染みやすく、初期段階から履きやすい。一方昔の革はオイルが少なく硬くハリがある。福嶋さんのお店に来るヴィンテージファンの方は、やっぱり昔のハリがある、ちょっと足に馴染むのに時間がか

階では、明確に説明はできないのですが。

**編集部** 本当にいい味に育てていくには時間がかかる。その時間という壁を超えなければならぬが、その壁を超えられれば、ゴールドラセット特有の深い味わいに育つてくれる、ということですね。

**福嶋** このゴールドラセットという革を使ったアイリッシュセッターは、ブーツを初めて買ったときのあの緊張感というものを、ふたたび体感できるのではないかなと思うのです。これから初めてレッド・ウィングを買う人にも、レザーブーツの魅力を深く理解できるアイテムになるのではないかと思います。

**鈴木** ヴィンテージの世界にいる福嶋さんにそういつていただけると、いいところまでいけたのかなという自信になりますね。

**編集部** デイテールも特徴ですが。



ヴィンテージショップ「ホープスマ」代表取締役 福嶋紀彦さん



レッド・ウィング・ジャパン 代表取締役 ゼネラルマネージャー 鈴木理也さん

かるとしても、硬い革を求める。そのハリのある革を今回のゴールドラセットで表現したかったのです。あとは透明感のある艶、テカテカとした艶ではなく透明感のある艶を出したかった。

サンプルとして保管してある50年代のレッド・ウィングのブーツをモデルにして、それに近づけるよう努力しました。

**編集部** 具体的な違いは？

**鈴木** 技術的な部分は熟練の技術者しか知り得ないところですが、タンニンが少し多め、オイルは少なめ、仕上げからワックスを加えることで、昔あったちょっと硬い、オイルの少ない革にしてあります。簡単にいうとそんなところですが、実際にはすごく精密な配合できあがっています。

**福嶋** いや、ホントにビックリしましたから。あとは、経年変化の具合。そこが一番気になる

でもワークブーツとしての強度や機能の問題から、進化のなかで変えなければいけなかった仕様もあります。そこは、戻せなかったりするのですけど、それ踏まえて、その当時に変える必要のなかった部分も、もし残していたら今はこういうモノになっていたのではないかな、というものにしたかったです。だから、無理矢理にアイリッシュセッターの、ワークブーツとしての進化をまったく無視してヴィンテージの仕様を再現したというわけではありません。

**福嶋** 僕はやっぱり、今回のアイリッシュセッターは革に興味があるの、正直デイテールにはあまり関心を持ってなかったのですが、でもデイテールから興味をもつ人もいるかもしれないことを考えると、この革のよさを広く伝えるためには、スバ

## 「経年変化の具合。それが一番気になるポイントです」

イスとして必要な要素です。今回

のアイリッシュセッターを入り口にして、ヴィンテージの道に

合はハリがある分、シワの入り方も遅いでしょう。そういう革のブーツが、ハードワーカーたちに長年履き込まれて、味のある状態が残っていたからこそ、ヴィンテージブーツとして現在

## アイリッシュセッターに魅せられた男たち。

レッド・ウィングの魅力を常に伝え続ける男と、レッド・ウィングの足跡を丁寧に検証することをライフワークとする男。今、ふたたび咆哮するレッド・ウィングのアイリッシュセッターについて、このふたりに大いに語っていただいた。



かつての「アイリッシュセッター」に使用されていた、サイドシールが施された靴箱を再現。歴史あるレッド・ウィング社だからできることだ。主に1950年代のアイリッシュセッターに使われていた箱。



対談場所のヴィンテージショップ「ホープスマ」が所有するヴィンテージの877。おそらく乾燥地で使われていたものと思われる。アウトソールに植物のトゲが刺さっている。「ここまでではき込まれるとすごいですね」と一同感嘆。

テーブルに並んだ新旧ブーツの下に、今回のアイリッシュセッターに使われているゴールドラセットの原皮が敷かれているのがある。対談のために鈴木さんがもち込んだものだが、広げてみると特有の色や光沢感がよりダイレクトに伝わってくる。オイル含有量を少なくしたゴールドラセットは、硬くハリがあり、ヴィンテージブーツに使われている革に近い。



Irish Setter アイリッシュセッターの咆哮 今ふたたび!



コチラも「ホープスマ」所有のヴィンテージ877。下部が黒ずんでいるのは、おそらく長い期間水に浸されながら作業をしていたからと思われる。革は使われる環境次第で育ち方も千差万別。

けでは伝えきれない部分があった、新品の市場とヴィンテージの市場が上手く共存することをお互いがよい方向へいければいいな、と思っています。だから、レッド・ウィングのヴィンテージブーツの研究をされている福嶋さんの存在は心強いのです。

**福嶋** レッド・ウィングは、まだまだ謎に包まれた部分が多く残されています。研究をしていくことで、デイテールやエイジングのことなどが徐々に解明されてきていますが、その情報を提供していくことが大切なことだと思っています。興味をもってもらい、楽しみ方を知ってもらえば、もっとブーツの魅力が

存在しているわけです。だから、今回のアイリッシュセッターは、ある意味ではヘビィユーザー向けかもしれません。僕らもヘビィユーザーが一年履き込んだらどうなるか、ということは現段階では伝えずに、新しいファ



両氏共に、新旧アイリッシュセッターの革の違いや仕様の違いを入念にチェック。福嶋さんは、とにかくゴールドラセットが気になる様子で、終止革の具合をチェックしていた。ヴィンテージも大好きな鈴木さんは、「ホープスマ」のヴィンテージをじっくりと観察。

